法華

立正安國論

全

日蓮大菩薩御書

法華立正安國論

宗門書肆　村上平樂寺藏

立正安國論

夫れ聖人の國論の書は日蓮謗國の忠書本朝に双ぶ流也
人皇八十九代龜山の院の正嘉文應元年七月十六日藻念
將軍宗尊親王の執權副元師小條相模守平時頼入道
宿屋左衛門尉光則を召して見を進ずるの旨深雲相月
を露ごとく淚を落に拭えず入道ぜして都て罪とを
伊豆の国に配流せらるる三年にして許容あるとゆへ
殺害に犯りて斬罪に行なはれんとゆへ佛神擁護宜て既に解
るとゆへ流に任せて伊豆の国を去て又免許あつて
鎌倉に還入せる之後陳て勿退くい賢者ゆへとて流

甲州身延の嶽よりつく九年を経て弘安八年十月十三日
武州池上に於て遷化し給ふ是より星霜五百年に及ぶと
いへども書世に流布せず唯其名字のみ聞て法人
物憶するのみ希也予西方に人を考へて或い書写するんを
見て納め置たりて物見ゆるさへ或い又点真字の
を添て唐人容易に憶るのあさいざる者と余深く是を歎き
別点を付國字とを男女知て憶やすからしめんの欲に
法人是を物憶して伝をおを法法をやめば天魔の仇て
魔人よりて身をおさめ家をとろの玉体治め天下泰
平の祈とをんの為文を拝なり憶者國字なる祈祷て
疫疫して隨獄の業消滅るとをんん

立正安國論

旅客来て嘆て曰く近年より近日よりこの天変地夭
飢饉疫癘遍く天下に満満くし地上に逢る半馬巷にあれ
骸骨路にしてり死を招くの類既に大半に及ぶこの是を
かるしまざるの族敵て一人もなし祈る所利剣即是の文祈
ちふと西方七宝の名祈とをへ或い疫病悪除の祈をさのと
東方如来の経を備へ或い病即消滅不老不死の祈祈
作て法花真実の妙文をあがめ或い七箇即滅七箇即生の
句を唱んじて百座百講のよそおひを調へ或い秘密法云の
数よりて人験の水祈そそぎ或い坐禅入定の儀を全して

室紀の屋を造り若ハ七鬼神の号を書て門に貼し若ハ
大力の形を畫ひて万戸よりけ若ハ天神地祇を祠して
正角正壊の祭祀をくはだて若ハ万民百性ハおハきんで国
主國宰の徳政を仰ふ去ることく食肝腦ハくづいて泉
飢渡ませあられを客員ふあぶれ死人眼よみてう屍を卧
していとゝ多く戸をゝべて指とゝを天ハ人れ
二離離を合せ大偉殊をつゝぬ宝貴世にいすして
百主いすゞ充ますゞ世ハやくもおとろふ法仰んで
もされるや是いづれの猶ようを法のよるや
主人の曰く猶ハるを然して胸臆ハ憤悲を客来
てなふ嘆ぜ去ばく徒ハ語をいさきん夫家ハ出て道ふ

いる者ハ法よりて佛を紹まるなり去るに今神祇も
うゝこゝ佛威も験ゝ〜ともに尚世のていくゝを
りて是にして後生のうゝびを發ま徒まゝ則衆優
を仰で恨をのゝ方戒を俯して慮をふゝを情激
愛を傾て祈経文をひくふ世皆ふ背ハ人急く
恵よ頃を故よ吾祈ハ法を拵ておさう聖人の所ハ
辭して久らゝ是をもつて魔来り鬼来り災起り
雖おこるいとぜんい有べゝ恐れぜんい有べゝ客の曰
天下の災ハ中の雖余猶嘆よあゝ流皆かゝめり
今蘭室にいつて初て芳洞を形るハ神聖ハ辭し
災雖ゝび起るいづれの経ハ出るや生後據をきん

主人の曰く其文繁多なれども僅に弘博なり金光明経に云く我れ本菩薩の道を行ずるとき衆生の為の故に諸天善神を請じて共に倶に法を聞かしめんと云云今此の国土に於て此の経あるを聞かず諸天善神何の故か国を捨て去る所を捨て来る何の故か国を捨て去る所を捨て来るの故に国土に悪鬼入り乱れ万民多く以て死亡に向かふ自界叛逆の難と他国侵逼の難と二つの難一に非ず二に非ず之を如何せんと云云

客の曰く天変地夭飢饉疫病二つ三つ四つ五つ重なり来る之を如何せんと云云

主人の曰く此の文の意は我れ本菩薩の道を行ずるとき衆生の為の故に諸天善神を請じて共に倶に法を聞かしめんと云云今此の国土に於て此の経あるを聞かず諸天善神何の故か国を捨て去る所を捨て来る何の故か国を捨て去る所を捨て来るの故に国土に悪鬼入り乱れ万民多く以て死亡に向かふ自界叛逆の難と他国侵逼の難と二つの難一に非ず二に非ず之を如何せんと云云

客の曰く天変地夭飢饉疫病二つ三つ四つ五つ重なり来る之を如何せんと云云

須臾の間皆長く法法も亦亡失せん時に於て空虚の中に大なる雨おつて地を震ひ一切皆あま縁く覆て狂
乱上悩のめぐらん城壁破れ落下り屋宇悉くひらけ
さけて樹林根枝葉花菓葉も亡ん唯浄居天を
除て欲界の一切の人七味三精の氣損減してあまりある
るるん解脱の法喜禅も時ふあらて一切つきん生ぜ
る所の花果味ひ希少して亦美うるぞ法有の井泉
地一切亡ん亡地枯涸して悪く鹹鹵して割裂しく
丘阜となるらん法山も皆燋燃せん天龍も雨を降さず
苗稼も皆枯乾して生ずるものは皆々亡て餘草
更亦生ぜざる亡をふるして皆昏闇ふして日月も照

況ぜ況ぜ仏方皆亡滅して去ばく法の悪鬼を況ぜんふ
業は道ふらう貪瞋癡は信婬して流生又冊よ於く是を
ろるる稼鹿のめぐるん流生及び衆命色力威光
減して人天の楽くを遠離して皆悪く悪道に落ん
めくのめくの石吾業の悪王と悪比丘と我正法を毀
壊して天人の道を損減せば法天善神王の流生を照
臨する者は渇悪の国をすて皆悪く餘方にむ
らん已上仏説経に云く国亡乱り時は先鬼神乱きん
鬼神乱るゝが如く万民乱れん賊来て国をかすめ
百姓亡喪して屍を路に横ん
天地怪異して二十八宿星の道日月時を失ひ度を失ひ

多く賊起るゆゑん糸云く我今天眼を以て照らか
に三世をつるに一切の王王皆己去世に五百の佛よつて
しによつて帝王王となるゆゑを以うう是を一切の聖
人羅漢とも。云うもこれ彼國土の中に来生して
大利益をなを若王の福法きん時ハ一切の聖人皆
捨去るゆをゑさん若一切の聖人去る時ハ七羅必死らん已上
藥師經ニ云く若刹帝利灌頂王等の災難起ん
時ハ不謂人亢疫疫難地國侵逼難自界叛逆難
星宿変怪難日月蔕蝕難非時風雨難已時ふ雨
難あらん已上仁王經ニ云く大王吾今化せる不の百億
の須弥百億の日月一〻の須弥ニ百億の天下あり其南閻

浮提ハ十六の大國五百の中國十千の小國二千世界の粟
散王あり其王王の中に七ツのおそるべきの難あり
一切王王是を難と云故ニ云く何をか難とせる日
月度を失ひ時若反逆し或ハ赤き日出黑き日お
二三四五の日お或ハ日蝕光なる〻或ハ日輪一重二重ニ
五重輪ハ現ずる所是を一の難とせるなり二十宿
度を失ひ金星彗星輪星鬼星火星水星風
星刀星南斗北斗五鎮大星一切王王星二公星
百官星かくのごとくの怪星各〻に変現せんを
これを二の難とせるなり大火國をやき万性燒亡
ん或ハ鬼火龍火天火山神火人火樹木火賊火く

のゆく変悪なるを見たるこの難とまるあり大雨
百性を漂没し一時若夏逆しまに面ふり麦の苗
冬の時雷電霹靂六月に氷霜雹降る赤水
黒水青水をふらし石山をふらし沙礫石を
ふらし江河さらさまに流れ山をうごかし石を
ゆくのゆく変ずる時をこれ例の難とまるなり
大風万性を吹殺し国土山河樹木一時に滅没
一時にあらざる大風黒風赤風白風天風地風
火風水風ゆくの如く変ずるを見るこの難とする
あり天地共に震動して炎火洞然として百
系亢旱し人穀みのらず土地赫燃として万性

滅尽せんゆくのゆく変ずる時をこれを亡の難とする
あり四方より賊来つて国を侵し内外賊起らん
火賊水賊風賊鬼賊百性荒乱し刀兵劫起ゆく
のゆく悪ずる時を見て七の難とするあり大集経に
云く若国王あつて正法世にありて施戒慧を修せ
我法の滅せんを見て捨て擁護せずんゆくのゆくうく
る不の正法の善根悉皆滅失して其国に当に三
の不祥のあるべし一つは穀さらく二つは兵革三つ
は疫病あり一切の善神悪く見を捨て離せば是を
教令せず人随従せずして方に隣国の為に侵焼せら
れん暴火横に起り悪風多く暴水増長して人民を

吹漂せん肉斤の狂風甚だに傑殺せんを主久しくふびし
てまさに重病にあへべし壽終るの後は大地獄の中
ふ生せんるいしまのぬく夫人をゑ大臣城主村主郡守
宰官もまゝくくのぬくるゑんに上夫に狂の文朗ゑり
百人これゝ疑ゑんゑるに盲聾の業迷惑の人妄に狂
徒を志んゞて正義をゑ紀まゑぞ故ふ天下世上法佛
元祖より於て捨離のふ狂生じてこれを擁護の志
みけん仍る吾神聖人國を捨て正狂さるゑをもつて
惡鬼邪乃宗をなし雖をいさもと客色をゑて曰く
後漢の明帝八金人の夢をさとりて白馬の教へをはゝり
上宮をゑハ寺屋の逆を深して寺塔のかまへをなしそれゝ

このゝ上一人より下万民ふいゝるすべて佛法をあがめ法華
を崇ふに依る時八厳山南北園城寺に海一州八幾七道に
紀里のゝゝくつゝなり堂宇八雲の如く布り甍ゝの族八
則鑾輿の月に紀し勅勅のゝぐひ赤縁足に風に偃ふ
これゝいゝん一代の教へをさひしゝ寶の塔を癈せんとせんや
若を徒あゝび愛く其故をきゝんと主人喻して曰く佛
圖蔓延つゝぬ經義軒をゑゝぶ偽八行章のぬく倡八
稲麻に似ゝゝ崇重年舊を日にあらゝなゝ但法
師稲曲ゝして人倫を迷惑しまゝ国ハふ晃ゝして邪
正を弘まゝゝゝゝ仁を經ゝ云く法の亟比丘八ゝく名
利を求て國主をゑまゝゝの前にれいてみゞゝ破仏法の

国縁破壊の国縁を従うんを主とし経を人びとして此経を
伝聴し模こ法制をなして仏戒をよろぶを破仏
破國の国縁とも上涅槃経に云く菩薩悪象等に於
ていん怖まるるゆゑん悪知識に於ていん怖畏のんを
生ぜよ悪友の為に殺されていこまぜ悪友の為
に殺されるゆゑ必こ謗にいこまぜ悪友の為
の比丘に近ぬ者にしてんん偏曲ゆんいまざ得ざるをはこと
おもう我慢のん充満せん或は阿練若に納衣よして空
閑よおつてみづから真の道を行ぜるといつて人ゐを軽賤せる
者あるん利養に貪着するゆゑ人は白衣の為に法を説て
世の者に恭敬せられんゆゑ通の聖道のぬくゆんなり

常に大乗の中にあつて我れを毀らんとゆゑまるゆゑに國
王大臣婆羅門居士及びよの比丘衆よむうつて能謗して
我悪行を説て是れ邪道の論義をとくといえん濁
劫悪世の中は多く法の恐怖あるん悪鬼ものゆゑにいつて
我を毀辱し罵詈せん濁世の悪比丘は佛の方便隨宜
の説法の所をあるゆゑ悪口して嗔恚し刀杖を擅出せん
上涅槃経に云く我涅槃の後五百歳に正法の滅人
悪くまこ涅槃せん正法をつこして滅縁法の中に於て
當に比丘あるべし縁は律行たもつを似て少しく経行
讀誦し飲食衣服貪嗜して其身行長養せん袈裟を
行ずるといえども猟師の細目を見て猶くるがごとく

猫の鼠ねらうがごとくなるべし　我
羅漢を得ようと和にい賢者を現じ問はん貪嫉邪
いざうん啞法を交る婆羅門ホのゆく實ま法つまあら
ぎして法門の係を現ト狂見燈を示して正法を滅
傍せんと上文より続て世ゆくるに滅にもつて法あり魚倡を
いまし〳〵めざんば豈吾ゆ邪みさんや　客狂憤て曰く昭王
は天地くよりて化をなし聖人は理妙をさろして世治む
世上の傍倡は天下の害なり魚倡く放ては昭王さん
ぞべうぞ聖人はあくまざんば賢哲作ぐべうぞ今賢聖の
道重なる邪仏て則ち能義の怪ふざる邪まる何ぞ去云
邪てあるうちく邪傍を為さん流人邪もつてう魚比丘と

いうんや要細くゆうんとかつまと　主人の曰く後
多羽の院の字に法独とふ者あり選擇集を
つくる則ち一代の聖教を破し編く十方の流生邪
まよはを選擇よ云く道綽禅師聖乃浄土の
二門を立て聖道を捨て正しく浄土ふ門まるの文
初めく聖道門といえれはいて二ッあり乃至これふ
おもんじてこれを捨ふにまさに密大及びもちひ実大
をぞんぜべし独れば則ち今真言仏天台花厳
三論法相地論摂論八宗の名正しくうく
あるなり曇鸞法師の往生論の注くに云く僧で能
樹菩薩の十住毗婆沙を案じて云く菩薩阿

毗陵頂法忠もとなるに二種の道あり一には難行道
二には易行道なり此中に難行道とは即ち
是聖道門なり易行道とは即是浄土門也
浄土宗の学者先まづ此宗を建てんとして
先より聖道門を学ぶべしと雖
門まれいて其志あらば頃く聖道をもて浄土に
向まべし又云く吾道和尚正雑二行をさつて雑
行をもて正行に帰すべしと
といへり上の記述の如若浄土
教大小乗教密の法を捨て已
をもてぐく讃誦雑行
とるべし私に云く此文は
まるを悪く礼拝雑行とるべし私に云く此文は
弘法をぐく雑を捨て専を修すべし豈百即
百生の専修正行捨てかく子中之一の雑修雑
行をとらんや行若よく是を思惟せよ又云く貞元
入蔵録の中に始め大般若経六百巻より法華経
経に渡るまで取密の大乗経惣て六百三十七部二千
八百八十三巻なり皆須讃誦大乗の一句を捨まべし
者に者なるべし隨他の義まい
とへども隨自の後ふに帰て定散門を閉一とよび

聞て以後永く閉ざるハ性見念佛の一門なりと又云
念仏の行者なりなどこんなる異見もべきの文紀を
見書給よ云く同く経の疏よ云く問て云く若解
行ふ同彩雖の人等あり和彩異見の雖をふせぐ或ハ
行るの一分二分をる行雖賊等喚びくもといふハ即
別解別行の異見の人等をさとる私よ云く又中ふ
一切の別解別行異学異見とハ是聖道門を
さしなり上又宗後諸白の文云く夫速く生死
をはなれんとおもはゞ二種の勝法の中に志しく
聖道門を閉て選で浄土門をいき浄土門をいん
とおもはゞ正雖二行の中に志しく法の雖行を拋

て選で當に正行よ向ふべし上これについて是代
ゐる仏墨響道綽善導の釈を引て聖道浄
土雖行易行の旨を法花真言勘て一代の大
宗六百三十七部二千八百八十三巻一切経佛菩薩及び
諸の世天等行もつて皆聖道雖行雖行等に拾
ふ或ハ捨或ハ閉或ハ閉或ハ抛ハ正字をもつて
多く一切経よ見る劉三國の聖僧十方の佛弟子
等をもつて皆雖賊とゐづけてゐるべ
る迫くハ仮の浄土のこと経の唯除又逆謗傍
正法の抵文よ者仏遠く
経の中二の若人ふ伝毀謗仏経乃至人命終入

阿鼻獄の儀文さまよふ苦を於て代来代
に及び人聖人さまざまに各冥衢にいつてるらびき
直道をとをれるるしきなる瞳矇を推ざるの痛
らひるいとづくに彩信仏僧をこと故よ上王を
分下士民よ云るまで皆経に浄土之教の外の絶
るく佛に弥陀の之号の外の佛なしとおもつり
仍て偽教義真義光智浅号或に万里の波濤
をとりて渡を不の聖教或に一乗の山川をとつ
て崇むる不の佛像若に宮山のいくづ紀に異仏
建て仏て安置し若に深谷の底よ蓮文仏起
してもつて崇敬を釈迦某仏の光仏るくるつるり

威を現尚よ施し虚空地祇の化をるせるやも後
に益をくふむる故に國を土に郷をよせてもつて燈
燭をあらしめ地仏に園をあてもつて供養にそ
なふ志るに法慈の擇擇よ依て則教ををとをれて
西土の佛陀をさつとく付属をなげうつて東方に如
来を留き唯に巻之教の経典をるわしむるく一代
八時の説典仏抛つて仏もつて弥陀の堂にあふさんべ皆
供佛の志をもつ念仏の人よあふざれいとく施僧のお
もひをとする奴く佛園参詣して瓦松の燈りむるく
老さう僧房荒癈して庭苔の為去べくふらし花と
ひて各復情のんをもてく苔に建立の思ひを廢仏をを

もつて往昔の聖教いまもつて明らかなる
るゆゑに慧能が法華の選擇よりこのかた
教十年の間百千万の人魔縁よりおこされて多く仏教
より遠ざかり傍を好んで正を捨てる吾神怒りをなさざらんや
圓を捨て偏を好む悪鬼たよりをなさざらんや彼万行を修
せんよりは一法をいのるべしと云うこと　客猶ほ惑ひて仏
教をなして曰く我が所釈迦文浄土の三部経を説きたまひて仏
滅後に曇鸞法師は四論の講説を捨て一向浄土に帰し
道綽禅師は涅槃の廣業を閣て偏に西方の行業を
ひろめ善導和尚は雜行を抛て専ら恵心僧都は
法華の要文を集めて念仏の一行を宗とし弥陀を貴

重せるゆゑに諸人これに従ひ帰して彼の文性生の人まいくばく
ぞやあるべし法然上人は初めは天台山ふのち
十七年にして六十巻の代講を覆し一切の経論七遍反覆し
結句看きたるものをといへども猶ほ
先師の跡を捨てこれを立て出離の道に迷ひ涅
槃の旨をわきまへず故に知恵あさく愚癡ふかく
思ひ遠く慮て遂に法華経を抛て専ら念仏を修せ
一代の聖教を閣て西方の教門に帰し弘むる故に或は勢
至の化身と号し或は善導の再来と作し徒に則ち十
方の貴賤は仏を捨てこぞ南無

ようこのうさ袁秋推移り星霜打積り志るに亦も
釈尊の教をおごそかふしてぶつひきに孫陀の文を匿し
みんぞ近年の災をもつて所代の時く深せあるべきに先
師をそしりて更に聖人を罵るや毛竹吹て疵を求め皮を
剪て血を出せ昔今よりかくの如くの悪云いまだ
聞ざ撞るべし慎むべし罷業いろて言に科除ろ
道れん尉座もつて忍れあり杖を携ず則ち地ろと
不つまと主人笑をやめて曰く幸るの竹蓼ふくるふひ
晃るを涸剛よとまる苦云竹吹て悪云を思ひ清者を
指ふ聖人と思ひ正師を貶て悪侶よるぞろふを迷ひ
誠くふふ其罪清ふに事の記り竹吹て要く手

法ぞ釈尊説法の間一代五時の名先後をさつて権
実をとれまふ墨磨道綽善導既よ権ふにをいて
実竹とまる先よりて後を捨ついまぐ仏教れ淵
底を探ふぞんいるんづく法華を流を砂とつくども其
源を尋ふぐ正ふいうんとるれば大乗経六百六十七部二千
八百八十三巻ふびに一切の法仏菩薩及び法の世天
等竹もつて捨用閣抛の字を並て一切衆生のんをとろ
うに是編よ私曲の詞をのべて全く仏経の流をくんぐ
妄語のおり悪口の科いつてもたぐひるーー責てもあま
りあり人皆手妄語を信じ悪く彼選擇竹ろとむ
故に浄土の三部経竹あるて流経を抛て極楽の一仏

仏作て法仏法とする微より起仏法経の怨敵聖僧
亢人の讎敵なり汝教唐く八荒に弘まり周く十方に
遍ぎ作近年の災難をもつて往代に保の史強に見
を忍る所先例所引て汝が迷ひ所悟べし止観第二に
史記所引て云く周の末に髮をかむり身をぎりて
礼義ようざる者あり弘決第二に文所釈して仏像
を引て曰く初に平王の東遷する時伊川髮を被る
者あらんと雖て地に於て祭る所に云る微者の曰く百年
を及ずして夷礼先ずわれひんと実に云ぬ微の前
所を災い後に云る又院籍を不ひきにして所
所にぐ帯所ひろげ云う後に公卿の子孫皆夷を

学ぶ奴苟の相辱むる者いまさに自拙く逆せんといふ
楊岐競持する者いよんで田舎に夷を司馬氏の滅
る相と云已上又慈覚大師入唐巡礼記所載云く
唐の武宗皇帝会昌元年に勅して章敬寺鏡霜
法師をして法を弘に於て弥陀念仏の教へ所作
寺に三日巡礼まるとき云ば同二年迦葉仏十軍云
唐の使を侵に同三年河水の節度使侯劾ちに
孔を起を手後に大蕃国ようまる命所こむ廻
鶻国分裂て地を棄ふる元兵孔秦項の代に
じし災尼里の際に起る何に況や武宗大く仏
法所破り多く寺塔所滅を撥孔まるにあらず

て。遂よ汉てるすあり已上取意これをもつて是を惟よ法慈
い浸多祇院の四字建仁年中の若るう彼院の四るの
既よ眼前よあり拙る則い大唐に倒を拭し名紹こ
徙て那已に法貌るのみうれ汝怖るのみうれ唯須く
幽を捨て吾に帰し源に ふさひて根に截べしと
客卿和して曰くいまぐ淵底に究めざれ去べく
手頷を去る徊し花洛よう柳営に至る迫釈門よ樞
楗あう仏家に株梁あう拙れ去いまぐ動状を進せ
ぐ上奏に及ぶ汝賜き名を汉て転く蒙云に去く
甚義おまう有を犯いるれるん 主人の曰く予が是
みうといへ示みくも大案に まるぶ蒼蠅い驥の尾こ

法いて万里に浸り碧蒭い松に よかつて千尋をのぶ
る一仏のみと生れて法絶のまにはふまつる何ぞ仏
法の衰微をうんて仏情の哀惜に紀さぶらんを上涅
槃経こ云く若吾比丘法に中ぶる者をうんて亟て呵
責し駈逐し擧愛せぐい當よ去るべし是人仏
法の中の怨ちう若触証遺し呵責し擧愛せい是
我弟子真の聲聞みう余吾比丘の弟子ぶとい
仏法中の怨の責に過れんが為に唯大綱をとつく粗
一端に志ぶ甚上去元仁年中よ延暦興福の衣寺
ようう衣く奏聞を絶勅宣に教出をやくぐして法慈
の選擢の市板に大備堂に元上てこ世の仏慈に報

ぜんぎ寺に堂を燒失せしむ法華經ぎ墓所に於て威
神院の太神人に付て破却せしむ其門人隆觀
聖光成覺薩生等をば遠島に配流せらるる漢朱
術勘氣を四るさんぞ豈いまぞ勘状をまいらせざと
いうんや　客則和して曰く經を信ぜざる
一人として論じ難し　法華經六百三十七部二千
八百八十三卷ならびに一切の法佛菩薩及び法の世
天等をもつて捨閣抛置の字に付のまうす何ぞ勘
ならう文証法華經ならびに浄土の教
迷ていふう覺て語るう賢愚を弁まへず是非を
但し宗旨の知り選擇よるのは暗に付て何を指し

称ふ所古民の思ふ所なり夫正法よりてさうに法
に人ふ依てさうに國亡びん滅せば佛をそれう崇むべ
法何されう信ぜべきや先國家何いのつて頃く仏法を
立ん若宗を消し難何中ずる術あらばのんとの
つまと　主人の曰く余い是須臾にして賢を捨ぜば
唯經文よりて邪正を何のぶ政治道の旨内外にる
ふ其文幾多なり具に擧べきうと但佛道いつて
志ばらく要を採ぶまうと清法の人何禁ぜ正乱の倡
何おもんぜば國中安穏ふ天下泰平なんぞ即涅槃經に
云く佛の法ならく唯一人何除て餘の一切ふ施さば皆讃歎

まべし純陀問て曰くいろんで名て唯一人を除くとまるや
佛の法ろくけ経の中に説不のめくの破戒あり純陀
又曰く我今いまだ解せざ住ねがろくい佛これ説き
純陀よ法ての法く破戒と一闡提をいまり其餘のあら
ゆる一切ふ布施せよ皆償欲まべし大ひなる果報をゆん
純陀又問一闡提とハ甚深いん佛の法く純陀若比丘及
比丘尼優婆塞優婆夷あつて麁悪の河をたろて正法
を誹謗せん乾竺業河造て永く改悔せざんよ懺悔ふ
んかくのめくの人を名て一闡提道よ親近をとす若四重
河犯し又逆罪をたろうらづろふ定てかくのめくの重るをを
犯をと云れを云ろもんに也べて怖畏懺悔ふくあて發露

もせ法彼正法よ於て永く護惜建立のふるく毀呰憎
ていろく邊咎わろうんとかくのめくおのくを示親近一闡提
乃とあづく住かくのめくの一闡提の業を除て餘の者ふ
施さば一切讃歎せん又云く我往昔をおもへば閻浮提よ於て
大國の主とあるき名河仙縁といふ大乗経典を毛念敬
重をるに毛ふ純吾ふして麁悪嫉妬有るを吾男子我を
時ふ於てんに大乗をれもんぜ婆羅門の方等を誹謗す
るをきく聞法て即時に手命根をろう吾男子毛因縁
をもつく毛ようふ来地獄よ墮ぜ又云く如来昔國王
とあつて菩薩の道河修しるぞ時ふそくだくの婆羅門
の命を斷絶ぜ又云く殺ふこっあり謂く下中上なり

下へ驢のるゐい〜一切の畜生なり菩薩示現生の者をば除く下殺の因緣所もつく地獄畜生餓鬼より隨異より下の若しみ所受る何をもつての由にこの法乃畜生ふ微若根あり是故より殺を若異より罪報を受ん中殺といえ凡夫の人より阿那含よりまで是を名て中とも是業因をもつて地獄畜生餓鬼よりより異ふ中の若〜みをうけん上殺といえ父母るい〜阿羅漢辟支佛畢竟菩薩あり河畏大地獄の中にあつべ〜若男子若能一闡提を殺せるもあらん者いは則此之種の殺中よりおちば若男子彼法の婆羅門等いは一切皆是一闡提あり已上仁王經より云く佛波斯匿王に告ぜらく是故

法の國王より付屬して比丘比丘尼より付屬せば何を以てのゆへにその威力あるれば法所もつて法のまた大臣宰相及び比丘の尼に若法を正法を毀らん者をば王若大臣比丘の尼に若法べ〜又云く佛の法ら〜迦葉よく正法を護持する因緣をもつてのゆへにこの金剛力所能なるゆを以ゆえ若男子正法所護持する若いは入戒を受ざれ威儀も修せざれまさに刀杖弓箭鉾槊を持べ〜又云く若入戒を受持するゆある若をばゆづけて大乘の人とするゆを以さるがゆえ入戒を受ざれを正法をまもるゆをまもる所乃ち大乘とゆづく正法を護りる若い當に刀杖器杖を執持

まべーカ杖刀杖といふを我是等経典に名て持戒と
いふん又云く善男子是の世に比丘尼婆羅門城に於て仏
の出世し給ふ事甚だ稀なり仏滅度の後正法世に住すること
二十年に仏法いまだ滅せざりき時小一人の持戒の
比丘あり名て覚徳といふ其時に多く破戒の比丘あり
是経典を説くを聞て皆悪人邪見を生じ刀杖を執持し
て是法師を逼む是時に国王あり名て有徳といふ
是人をきくまでに護法の為の故に忍辱の鎧を
着の石に住して是破戒の徒の悪比丘と極て強
戰闘をする時に彼法者危害をまぬかれるを為

うる事を得時に於て彼比丘刀杖鎧鞋の身に充
る躰より毒の水のながれもすつる如くなる事を時に
覚徳比丘いまだ仏にはなれて云く善哉善哉大聖
是正法を護人あり尚来の世に此人当に無量
の法器となるべし是時に於て法をきくを
を得おはりて仏に成ぬ其命終して阿閦仏の国に生じて彼仏の為に第一の
弟子となる事を得此人さきの人民眷属戰闘
をなすあり若欲毒を以て一切善
提の心をうばへば命終して悪く阿閦仏の
国に生ずべし覚徳比丘さきの人民眷属を捨て阿閦

佛の法に住生するゆえに彼佛の為に奏聞所の中の第二の弟子となる若正法滅亡せんとするの時あらんが當よかくのごとく文殊擁護をべし迦葉仏の時の王は則ち我身是なり彼法の比丘は迦葉仏是なり迦葉正法を護らん者はかくのごとく多の王等の果報を得んと雖国土をもつて我今日に於て稠林に相を得てもつてみづから莊嚴し法身不可壞なるを仏迦葉菩薩に告げたまはく是故に法を護りて優婆塞等は皆ことごとく杖を執持し擁護すべし吾男子我涅槃の後濁悪の世に国土荒乱し互に相劫掠し人民飢饉せん其時に多く飢餓の為の故に殺人出家するものあらんかくのごとくの人を名て禿人と云是禿人の悪正法を護持するを見て駆逐してあさしめ若は刀杖を加へ若は害せん是故に我今持戒の人に向て法の白衣の刀杖をもつ者ありもつて俗と云刀杖を持と云は我是等を説て名て持戒と云ふ刀杖をもつと云は命をすてて法華経を云く若人悪世に於て此経を毀謗せば即一切世間の仏種を断ずるなり私の御ゆんでくはへん允法華経の如くんば大乗経典をそしる者は仏道の人道よ

勝れる国に珊鼻大城におちて永く出る期なし
涅槃経のぬくんでたとひ逆の供をば仰せて僧法
の施しをのぞさで嬢るを殺す者いるならば之悪道
に落る傍法をいやしもる者は定まつて不過の位
に光る而謂見徳は見迦葉佛ありう有徳は則ち
釈迦文ありう法華涅槃の経教は一代八時の肝心
ありうをいやしめ実におもしられ偏仰せざらん
や法の族は正道の人をとすれ新法邪ぶ
選擇よりて仏是癡の盲聾をまねこれをもつ
て或は彼逆謗よりて本畫の像あるは或は
其妄況をまんじて芬云の模を彫て海内ふこれ

をひろめ塚和に見を設め仰く和は則ち家風ありう
施を和は則其門弟ありう拙る万或は釈迦の名指を
きつて弥陀の下相を結ぶ或は東方如来の居宇
を改めて西土教主の称を居或は四百餘週の如
法経をやめて西方浄土の三部経よりし或は天台
大師講を停て吾道導講とるはかくのめくの辯
説を滅ぶ蓮しぶ見破仏よりあくまでや見破法
よりあくまでや見破僧よりあくまでやし邪義見選擇よ
るなりあるかなしき哉如来滅後の禁云よ肯く
るあるれるる邪見倍逆或の鹿倍よりうてあ
く天下の静謐を思ふ須く國中の傍法をうべと

客の曰く若し謗法の業を断じ若し仏禁の違を絶せば
彼の経文の如く斬罪に行ふべきか若し然らば殺害相加
へば罪業いかゞせんや則ち大集経に云く頭を剃り袈裟
を著せば持戒及び毀戒天人彼を供養すべし則ち為れ
我を供養するになんぬ是れ我が子なり若し彼を撾打
する事ある則ンば是れ我が子を打つなり若し彼を罵
辱せば則ち是れ我を毀辱するなりとえうりしりぬ善悪
を論ぜず是非を択ぶことなく僧侶たるに於ては供養
とのぶべしなんぞ其子を打辱しめば忝も其父悲哀
せん彼の竹杖が目連尊者を害せしや永く無間の底に
沈み提婆達多の蓮花比丘尼を殺せしや久しく
阿鼻の焔に咽ぶ先證これ明かなり後昆最も恐るべし
謗法を誡るに似て既に禁言を破る此事信じがたし
いかんが心得ん　主人の曰く客明かに経文を見
て猶このことばをなす心のおよばざるか理の通ぜざるか全
く仏子を禁むるにあらず唯偏に謗法を悪む
なり夫れ釈迦の以前の仏教は其の罪を斬るといへども
能仁の以後の経説は則ち其の施を止む然れば則ち
四海万邦一切の四衆其の悪に施さずして皆此の善に帰
せばいかなる難かならび起りいかなる災か競ひ来らん
と　客則ち席を避け襟を刷ひて曰く仏教斯れ区々
にして旨趣窮め難く不審多端にして理非明かなら

なんぞ但法然上人の選擇集ばかりなる法然法師
法華經法天等なりもつて拵邪宗門抱と義するゆえ文
殊菩薩法天等なりこれによつて聖人いまこれを拵
て天下飢渴し世上疫癘に今を人廣く經文を引
て明らかに証拠を出だす故に妄執既に顯はれ耳目
を驚かす剋り不淪國土泰平天下安穩の一人なり万
民ことごとくまで好むに不なり称ふに不なり一圓捲
の施しをやめて永く庇侍尼の供をいとし佛海の
白浪をはさめて法山の緑林を栽ん世の義農の世と
なり國の唐虞のごとくなんぞ独して後に法水枯涸
を斟酌して佛家の棟梁を崇重せんと　を人

悅んで曰く旃化して鶴となり雀變して蛤となる
るいとこびしひ我汝蘭室の友ときどころして麻
畝の性となる縱ひ蓬ひ雖を顧て生ずる此言を信ぜ
ば風やうやうき浪靜かなるして不日に豊年なんのこ
但し人のこころの時に隨て移りもの性の境によつて
改まる孔子の教へ水中の月波に動き陣前の軍の
紛はしきがごとくなり汝尚疑ひ信ずといえども後に
定めて永くはすまじ若先國を安んじて現
尚をいのらんとおつせば速に情慮を回らして急て
對治を加へよ不然いうん業障經の七難の内又難
忽に起りこれ二難竝ぶ時まさにいまこれ他國侵逼難自

異類異離なる大集經の三災の内二災まぬれ一災いまだ起らざいまるを華嚴なる金剛山經の内種々の災過一一に起るとゝを他方の怨賊國内を侵掠に付災いまだあらんまぬ難いまだ來らざ仁王經の七難の内六難今盛ふして一難いまだ及ばざいまるに方の賊來つて國を侵の難なり去りのゝ

るふに國亡ぶる時は先鬼神亡るゝ次に人は万民亡る今は文まをいて賊を異にするの情を案ずるに百鬼夜行して亡ぶ先難是なり後災なんぞ疑ふん若謗る不の難惡法の科よりつてなふに起り競ひ來ふに時はいかんせんや帝王は

國家を基として天下を治め人民は田園を領して世上平保つ去るに他方の賊來つて其國を侵逼して自異類離して其地を掠領せん豈驚るざらんや豈怪ざらんや國を失ひ家を滅ていづれの不幸世を遁れん汝須く一身の安堵を思ふ先四表の靜謐を祈るべき者なるんぞ人の世にあつて各後生を恐る是をもつて或は邪教を信じ或は邪法をさづゝ各是非を辨ふ是非を辨ふ迷ふ人くむと

じき信仰の力をもつて妄に邪法に向ひ何ぞ謗んや若執心難捨に亦曲を執ぞんぜば不幸有るの

鄉を辭して必ず他方の獄に向かふべし大集経に云く若國王あつて正法を修せず我法のゆつるを聞いて擁護せざんば譬へば猶ほ根惡く皆滅失せんがごとし其王久しからずして當に亡國に向かふべし壽命終の後大地獄の中に堕ぜん王のゆく夫人太子大臣城主村主郡主宰友もまたかくのゆくなん仁王経に云く人佛教をやぶらば又善なく亡親ふ和よして天神たすけず疾疫惡鬼日々に來つて侵害し災惟首尾よ禍を連ぬるゆ縱横よして死して地獄餓鬼畜生ふいなん若出て人となるゆば兵奴の果報よして

鄉里のゆく果のごとく人の夜るものの出に火ハ滅ぬれば宅ハ
ぞんぜるうごとし三界の果報又くのごとくなん法華経第二ハ云く若人不信して此経を毀謗せば乃至
其人命終して阿鼻獄にいなん又同く第七巻不軽品
に云く乃至幼阿鼻地獄に於て大苦悩を受けんと涅槃
経に云く若友を遠離して正法を聞かざ惡法に住
せん者是因緣の力に沉没して阿鼻地獄にあつて
受る所の身形八万四千由旬なん廣く長舌を
ひろくして千々の舌を出して一々皆正法の
門を出て深く邪法の獄に入る惡なる者惡友の網
にかつて須ふ傍法の網にとらるゝ此縛霧の迷ひ彼

譬喩の底に沉むんと豈愁ひざらんや豈歎かざるしまざらんや汝早く法華経に帰して速に実乗の一善に向せよ然る則は三界皆仏土なり仏国それ何か到らん十方悉く寶土なんぞ破れんや国土豊饒なり万民快楽なんぞ憂へざらんや今此の娑婆世界は唯我が一人の所領なり其の間の諸難何か以て来たらざるべきや

客の曰く今生後世誰か慎まざらん誰か恐れざらん仏経文を開いて具に仏語を聴くに謗法の輩は地獄に堕ちて永く出ずる期なしと

三部経を作て法華を閉じ私曲の思ひを成して則先達の師を軽んじ十方の法人を軽しめ

今世の性禅等は来生の阿鼻を免れんと欲す文証既に顕然なり何ぞ経典を閉じて徒に邪師の教へを仰ぐや

主人の曰く汝は一切の人の師なり我は一国の主なり師は弟子を教へ主は臣下を治す

然るに今主を教へて師を忘れ国を治して法を捨てんか

文永元年 古歳庚申 七月勘之

立正安國論終

日蓮

論中或問

或人難じて曰く法華の經は未那含實と挍るべからず安國論に法華の經は引て證文とすれども自語相違するにあらずやいかん　答て曰く然る釈尊一代の聖教大ひろきて二つとなし一つまた大綱なり二つは綱目なり初に大綱とは故佛居の教なり故佛得道の教とは唯法華經半なり次に綱目とは法華の經也彼法華經は不故佛の教なり故仏得道の文言を說とし且名字のごとくあつて実義は法華經ならず故に待教大師決權實論に云く權智不佛は唯名字のごとくあつて其実義なるべしと云へり但權教ならば故佛得道の外は說相むなしくなるべし故佛得道の法華經の為の綱目なるべきを餘の綱目は元典大綱は法華經なり是をもつて法華の說文に是れを引用ひ給ふなり　問て曰く法華經を大綱とする說文いかん　答て曰く天台大師の曰く當に知るべし此經は唯如來說教の大綱を說て綱目を要細にせざるなり　問て曰く法華綱目とする說文いかん　答て曰く妙法の云く皮膚毛髓は出て元典にありと云へり　問て曰く故佛は法華に限りと云

経文いうん　答て曰く法華経に曰く唯有一乗法
を二乗を三と説給つり　問て曰く法華ハ法華経
の名といふ経文いうん　答て曰く法華経にいはく
稱讃の道を志めしといふ人も其実ハ佛乗の名なり
と説給へり経に今得ぬきるなり　或人又問ふ佛
の正法ハ法華経とかぎるに豈安國論に法華を云
ふを能傍をとあげるや　答て曰く選擇集ハ
一切の大乗小乗法佛菩薩法天等を搦宇宙
抛と云る也〻経ハ阿弥陀の三部経の外ハ廢せん
と云佛ハあみだの三部の外ハ一切法佛を廢せんと
する也に選擇集の所を志ふせんが為に略く念

佛宗の外の法宗を立ける也て法然一人ぞあや
まりを志ふせんが為に略く法華真実経能
得をと書とり給ふる也をあ〻ていふとゆるり
奪ていふ所ハ法華の外の余経を建る宗旨
ハ未法ていを得道なるゆへに法宗を得る隨地
獄法華一人の為佛と云〻ぬ故ぞ
唯有一乗法を二乗を三と云ふ也なり故に經書十九卷
三沢抄に依法華の法門ハ佛の余経と見合せと
捉しうう愛況て此安國論ハ況是也るに
法然が弟子傍義佛の〻を責給ひて餘宗ハ
ぞとん得ぬきるり當世よいうてハ日本國中〻ぐ

顯同と素佛とのニッよう和ゐ〜眞宗亡國律法
賊徒禪天魔祠も皆素佛門にゐゞれいつて〜云禪
律等の教〜いまこゝれて唯淨修念佛の法然が門
流とゐきり故よ唯素佛無量と心得べきなり
け書紙見の人若心得遠もあゝんうとけ或間を後
〜に後〜おうんぬ

日蓮宗御經書籍製本發賣所

京都市東洞院通三條上町
御用書林 平樂寺 村上勘兵衛